

経済学体系と外国貿易論

渋谷 将 著



青木書店

渋谷 将

1932年 埼玉県に生まれる

1957年 立教大学大学院経済学研究科修士課程修了

現在 中央大学商学部教授

経済学体系と外国貿易論

1981年3月1日 第1版第1刷印刷

定価2800円

1981年3月15日 第1版第1刷発行

著 者 渋谷 将
発行者 山 根 襄

発行所 株式会社 青木書店

東京都千代田区神田神保町1-60

振替口座・東京 8-36582番

電話・東京 (292) 0481 (代表)

郵便番号 101

© Susumu Shibuya, 1981 柳沢印刷・黒岩大光堂

ISBN4-250-81007-0

はしがき

本書はこれまで外国貿易論にかんして書いてきた論稿をとりまとめたものである。周知のように、マルクスはかれの経済学体系の一環として外国貿易の問題もあつたことを予定していたが、それは結局、まとまった形では果たされないままに終わった。そこでマルクスの経済学の方法にしたがって、外国貿易の問題を理論的にあつかっていくにはどうしたらよいかを経済学上のひとつの重要な課題となり、これまでもこれについて数多くの研究が発表されてきた。本書の内容をなすものも、こうした研究動向を背景として書かれたものであるが、そのような研究に取り組むにあたって、わたくしが意図してきたことは、マルクスの資本の核心的構造の分析の到達点をしめす『資本論』のなかで、必要なかぎりで関説されている外国貿易にかんする記述について、外国貿易論の展開にとって重要と思われるものをとりあげ、それが資本の分析のなかでどういう契機との関連でいわれているかを明らかにし、さらにそれについて外国貿易論という点からみてどのような関連を考へることができるかをさぐってみることによって右のような研究の一端に連なることであつた。その意味において『経済学体系と外国貿易論』というやややおおげさな表題をかかげているものの、本書の内容はせいぜい外国貿易論の展開を遠望しながら、マルクスの経済学体系との関連でみた外国貿易論にかんする試論的考察といった程度のものであるにすぎない。

はじめにものべたように、本書はおおむね右のような意図のもとに書かれた八篇の論文から構成されている。ただし、第Ⅳ章だけは今回あらたに書いたものである。既発表の論文の収録にあたっては、節の見出しをつけたり、参照の便宜のためマルクス、エンゲルスからの引用の指示について *Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Dietz Verlag, Berlin (MEW と略記) のページ数を付記したりしたほかはすべて

発表当時のままである。

第一章「『資本論』における『外国貿易』」は、もと「外国貿易論に関する覚え書き——『資本論』と『外国貿易』の関連を中心として」という表題で『帝京経済学研究』第一巻、第一号（一九六七年三月）に発表したもので収録論文の二番目に古いものである。ここでは『資本論』と「外国貿易」の関連という点に問題をしばって、外国貿易論について考えていくうえで、あらかじめ明確にしておくことが必要と思われるいくつかの論点について以後の研究のための予備的な覚え書きとしてまとめたものである。そのような内容のものでちょうど本書全体にとって序論的意味をもちうると考え第一章とした。

第二章「資本主義における外国貿易の必然性」は、もと「外国貿易の必然性について」という表題で『世界経済評論』一九六二年二月号に発表したものであるが、わたくしの公表した最初の論文で本書収録論文中最も古いものである。かれこれ二〇年近くもまえの未熟な習作を埃を払って収録することにはかなり強い感慨を感じたが、ひとつにはこの問題についてのわたくしの考え方は基本的には今も変わっておらず、たとえ書き直したとしても表現上のことであろうと思われたこと、また、もうひとつにはともかくもこの問題についてのひとつの考え方としてひきあいに与えられる機会も多かったことを考慮して、あえてもとの形のまま収録することとした。なお、この論文の発表当時、わたくしは世界経済評論社（現世界経済研究協会）の編集部勤務して『世界経済評論』誌の編集の仕事に従事しており、当時の同誌と国際経済学会とのかかわりから、編集担当者が一方の学派の立場にたった論文を発表することとは、たとえ個人の資格であっても同誌の編集方針について無用の誤解を招くおそれがあるとの社内の意見を入れて池谷進という筆名で発表した。この前後にいくつか東独の文献紹介などを同誌上にしているがそれらもこの筆名になっている。

第三章「リカードウの外国貿易論について」は、『帝京経済学研究』第三巻、第一号（一九六八年二月）に同じ表題のもとに発表したものである。マルクスの外国貿易についての記述は、しばしばリカードウの外国貿易についての所

論を念頭においてなされていること、またわが国における「国際価値論争」をはじめとして、この分野の研究においてもリカードウの外国貿易論に閑説されることが多かったことから、それについてわたくしなりの理解をしておく必要があると感じて書いたものである。しかし、いま思い返してみるとこの論文を書いた当時には、リカードウの外国貿易論について否定的評価により多く傾斜した不十分な考え方をしており、その考え方は第Ⅴ章で紹介したマイアーのリカードウ批判にも通じかねないような弱点をもっていた。そのことはこの論文の論旨のかぎりでは、かならずしもはつきりとは表面にあらわれてはいないが、いま当時を思い返してみるとそのことに思いあたるのである。リカードウの外国貿易論については、この論文であつかいえなかった問題も含めていずれ別の機会にあらためて論じてみたいと思っている。

第Ⅳ章「外国貿易と価値法則」は、今回あらたに書いたものである。国際価値論の問題は、わたくしにとって長いあいだ悩みの種であったし、今でもそうである。それは外国貿易論にとってこの問題がいったいどういう意味をもつか、なんのためにこういう問題を論ずる必要があるのかという点がなかなかはっきりとつかめなかったことによる。今もってその点が十分に明確になったというわけではないが、本書をとりまとめる機会に、ともかくも現在、わたくしの理解しえているかぎりでは、この問題についてまとめておくこととしたものである。その意味ではまったく一個の試論に止まる。

第Ⅴ章「国際価値論と不等価交換論」は、同じ表題で『商学論叢』第二二巻、第四・五・六合併号（一九八一年三月）に発表したもので、第Ⅳ章とはほぼ同じ時期にいわばその副産物として書いたものである。内容的には最近ヨーロッパで一定の影響力をもちつつある「不等価交換論」を素材として、国際価値論の意義を再確認しようとしたもので、第Ⅳ章の補論といった感じのものである。

第Ⅵ章「外国貿易論における国際的分業の把握について」は、同じ表題で『帝京経済学研究』第五巻、第二号（一九七二年三月）に発表したものである。『資本論』第一部、第四篇、第一三章「機械と大工業」における国際的分業に

ついでに記述をとりあげ、外国貿易論の展開のなかに、それがどのように生かされるべきかを外国貿易論の方法を考察するなかで論じたものである。そこでのべた外国貿易論の方法については、その後いくつかの批判やまたこれと異なる方法の対置などがあつた。この論文の収録にあたつてそれらの批判や問題提起について、とりあえずごく簡単な〔補注〕をつけてふれておいた。

第Ⅶ章「機械制大工業と国際的分業」は、もと「マルクスの国際的分業論についての一試論」という表題で『商学論纂』第一五巻、第六号（一九七四年三月）に発表したものである。マルクスの分業についての把握を適用する形で国際的分業という範疇の内容を明らかにしようとしたもので、第Ⅵ章の統篇といった内容のものである。これについてもこのようなやり方は、マルクスの方法に「反するものだとの批判（久保新一「後半体系」理論化のための一視点」『経済系』第一一三号、一九七七年九月）もいただいているが、批判者とのあいだには『資本論』そのものについて大きな考え方の相違があり、その点から論じていくということになれば、あらたにひとつの論文を必要とすることにもなるのでそれにふれることは割愛させていただいた。わたくしとしては、そういう問題もさることながら、国際的分業に関連しては、むしろ最近、多国籍企業の在外生産について問題とされている「企業内国際分業」、あるいは「生産の国際化」といった問題とここでの国際的分業の把握とどうかかわるか、これらの現象を国際的分業論の視点からどうみたらよいかなどについて基本的な考え方だけでも注記しておきたいと思い、若干その作業を進めてみたが、注記程度ではおさまりそうもない分量となること、またその過程でなお十分に考えてみなければならぬ点があることにも気づいたのでこれも別の機会に譲ることとした。

第Ⅷ章「諸資本の競争と外国貿易」は、同じ表題で『商学論纂』第一八巻、第二・三合併号（一九七六年九月）に発表したものである。第Ⅶ章で国際的分業形成の具体的な契機として捉えた生産過程の「突然の飛躍的拡張能力」にたいする「原料と販売市場の点での制限」とその突破という論点について、それが諸資本の競争によってどのように媒介されているかを明らかにしようとしたものである。

本書の内容および各章の執筆にあたっての経緯は概略以上のようなものであるが、通常ひとつの書物にまとめるために要するであろう期間のおそらくは倍以上の期間をおいてできあがった産物がこのような貧弱な内容のものでしかない自身の非力と怠慢には、ただただ恥入るばかりである。しかし、このようなものでも、ともかくもこうした形でまとめることができたのは、多くの方々のさまざまな御指導のおかげである。とくに安村重正、木原行雄、宮崎犀一、柴田政利、堀晋作、辻忠夫、堀中浩氏をはじめとする国際経済研究会のメンバーの方々と自由な討論からは、たえず新鮮な学問的刺激を与えられてきた。また、帝京大学経済学部のかつての同僚の方々、現在わたくしが勤務する中央大学商学部と同僚の方々にもきわめて多くのものを負っていることはいうまでもない。これらの方々に心からの感謝の意を表させていただきたい。

最後に、本書をまとめる機会を与えてくださった青木書店編集部の方、荒井俊昭氏にも厚く御礼を申し上げる。氏のおすすめがなければこのような形で本書をまとめることもなかったであろう。わたくしとしては、氏のおすすめに便乗させていただいたというのが偽らざる心境である。

一九八一年三月一日

渋谷 将

目次

はしがき

第一章 『資本論』における「外国貿易」	3
---------------------	---

第一節 考察の視角	3
-----------	---

第二節 『資本論』の叙述内容の性格と「外国貿易」	6
--------------------------	---

第三節 「経済学の篇別プラン」と「外国貿易」	14
------------------------	----

第四節 外国貿易論の内容	22
--------------	----

第五節 「反対に作用する諸原因」における「外国貿易」	28
----------------------------	----

第Ⅱ章 資本主義における外国貿易の必然性	33
----------------------	----

第一節 問題の所在	33
-----------	----

第二節 外国貿易の概念	36
-------------	----

第三節 レーニンの外国市場の必要性についての命題	42
--------------------------	----

第四節 外国貿易の必然性の解明についてのレーニン命題の意義	46
-------------------------------	----

第五節 「国家範疇の把握」の問題	49
------------------	----

第Ⅲ章 リカードウの外国貿易論について

第一節 従来の評価について

第二節 『原理』第七章の先行六章との「体系的関連」

第三節 『原理』第七章の位置

第四節 「比較生産費説」について

第Ⅳ章 外国貿易と価値法則

第一節 問題の所在

第二節 国際価値にかんするマルクスの記述

第三節 国際的交換と国際価値

第四節 国際価値論の意義

第五節 関連するいくつかの問題

第Ⅴ章 国際価値論と「不等価交換論」

第一節 問題の所在

第二節 古典派貿易論批判

第三節 世界市場における価値法則の問題

第四節 不等価交換について

第Ⅵ章	外国貿易論における国際的分業の把握について	161
第一節	外国貿易論と「国際的分業」	161
第二節	外国貿易論の方法	163
第三節	「国家」と「国民経済」	172
第四節	国際的分業についてのマルクスの記述	184
第Ⅶ章	機械制大工業と国際的分業	201
第一節	問題の所在	201
第二節	マルクスの分業論	203
第三節	社会的分業の国際的展開	214
第四節	国際的分業の独自性	221
第Ⅷ章	諸資本の競争と外国貿易	235
第一節	「外国貿易の必然性論」と外国貿易論	235
第二節	外国市場の必要性についてのレーニンの命題と競争	237
第三節	実現問題と外国貿易	248
第四節	外国貿易と超過利潤	258

経済学体系と外国貿易論

第1章 『資本論』における「外国貿易」

第1節 考察の視角

——『資本論』と「外国貿易」の関連——

外国貿易の問題の理論的とりあつかいはいかにあるべきか、あるいは、外国貿易論とはどのような理論であり、どのように展開されるべきか、ということはマルクス経済学の領域における未解決の理論的問題のひとつである。この章では、外国貿易論について考えていくうえで、あらかじめ明確にしておくことが必要とおもわれるいくつかの論点について、あつかうこととする。そのさい、『資本論』と「外国貿易」の関連というひとつの視角を設定するが、それについて、はじめに若干の説明をしておくことにしよう。

周知のように、マルクスは「経済学批判序説」や『経済学批判』の「序言」、あるいは一八五〇年代に書かれたいくつかの手紙などにおいて、「資本」にはじまり「世界市場」をもっておわる「経済学の篇別」を指示し、外国貿易についても、その一部分としてとりあつかう予定であったことを示している。

たとえば、『経済学批判』の「序言」においてはつぎのようにのべている。

「私は、ブルジョア経済の体制を、つぎの順序で、すなわち資本、土地所有、賃労働、それから国家、外国貿易、世界市場の順序で、考察する。はじめの三項では、私は近代ブルジョア社会がわかれている三大階級の経済的生活諸条件を研究する。他の三項の関連はおのずからあきらかである。」⁽¹⁾（傍点——原文のまま）

マルクスのこの計画は、一八五九年に出版された『経済学批判』の執筆にあたつてたてられたものであり、のちに一八六七年に出版のはこびとなった『資本論』第一部、さらにその後エンゲルスの手によつてまとめられた第二部、第三部を含めて、現在、われわれの手にある『資本論』が、この『経済学批判』当時の「篇別プラン」の項目のどこまでを含んでいるのか、またその間に「篇別プラン」自体に変更があつたのか等々の問題（いわゆる「プラン問題」）については、いくつかの見解が存在している。しかし、そのいずれの見解についても、「国家」以下の項目（いわゆる「後半体系」）は、『資本論』においては、固有のものとしては論ぜられておらず、「国家」、「外国貿易」、「世界市場」の諸項目については、なんらかの形で展開されるべき領域として残されている、という点については意見を同じくしている。そして、このことにもつづいて、マルクスの書きのこした「経済学の篇別プラン」をよりどころとする「外国貿易論」あるいは、より包括的な理論として「世界経済論」の体系的展開のためのさまざまな試みがなされてきたのである。

ところで、従来のこうした試みにおいては、『資本論』と「経済学の篇別プラン」の「後半体系」はどのような関係にあるか、また、『資本論』から「後半体系」（より直接的には「国家」）へどのように移行するか、そのためのコメントはなにか、ということが、まず最初に解決すべき問題として設定され、したがって、外国貿易論あるいは世界経済論の体系的展開の前提として、まずなによりも「国家範疇の把握」がなされなければならない、という考え方が理論構成の重要な骨組みとなっている。⁽⁵⁾このような考え方は、たしかにひとつの筋道として成り立ちうるが、しかしそれはかならずしもこの場合、ありうべき唯一の筋道ではない。もし、「プラン」を手がかりとして問題を考へていくとすれば、「国家」、「外国貿易」、「世界市場」の各項目それぞれについて、それらの項目はどのような内容をもつたものであるか、それらの項目のもとに、マルクスはいったいどのようなことがらを含ませようとしていたのか、ということマルクスの経済学の方法に即して考察することもまた、もうひとつの、そしておそらくは、この場合にはより本来あるべき形の筋道として成り立ちうると思われる。そして、この後者の筋道にしたがうならば、『資本論』

において、それ自体としては展開されていないけれども、必要に応じてなされているそれら諸項目に関連した叙述の意味を十分に汲みとることが、まずさしあたって必要となってくる。なぜなら、それらの叙述は、『資本論』自体の叙述の性格からして、本来の叙述に必要なかぎりでのことにとどまっておき、国家や外国貿易の問題についての固有のとりあつかいという観点からみれば、きわめて限られた内容のものにすぎないけれども、それらは、資本制生産の運動法則を構成する特定の諸法則の究明にあたって、特定の意味をもって記述されているのであって、それがどのような法則とのどのような関連のもとで言及されているか、ということ进行を明らかにすることは、「後半体系」の諸項目の内容を考えるうえにきわめて重要な手がかりとなるとおもわれるからである。従来の接近のしかたにおいても、このような視点がまったく無視されていたわけではないが、問題が「後半体系」への移行、したがって「国家」への移行という点に集中されていたために、比較的稀薄であったように思われる。

『資本論』と「外国貿易」の関連という視角を設定したのは、およそ右のような考え方からである。そして、このような視角からすれば、『資本論』における外国貿易に関連したいくつかの記述について、それが外国貿易論にとってもつ意義を考察することが当然課題となるわけであるが、そのためにはあらかじめ外国貿易論そのものについて、およそそのりんかくだけでも明らかにされていなければならない。その意味において、この章では、『資本論』と「外国貿易」の関連という視角から、外国貿易論の性格と内容について考察しておくこととする。

(1) Karl Marx, *Zur Kritik der Politischen Ökonomie*, Dietz Verlag, Berlin, 1951, S. 3. 邦訳『経済学批判』国民文庫、七ページ。(MEW, Bd. 19, S. 7)

(2) このような研究動向を概観して論評したものとして、柳井哲男「世界経済論の方法」(『世界経済評論』一九六四年五月号)および吉信肅「経済学批判体系と『資本論』」(『マルクス経済学体系』Ⅱ、有斐閣、一九六六年、所収)がある。

第二節 『資本論』の叙述内容の性格と「外国貿易」

外国貿易についての固有の考察が『資本論』には含まれていない、ということ、『資本論』の叙述内容の性格に即してあらためて確認することを通じて、外国貿易論の性格を明らかにすることがここでの問題である。

『資本論』で叙述されている内容が、基本的にいかなる性格のものであるか、ということについては、マルクス自身つぎのようにのべている。

「生産諸関係の物象化・および生産当事者たちに対する生産諸関係の自立化・の叙述においては、吾々は、世界市場・その状況・市場価格の運動・信用の期間・産業および商業の循環・繁栄と恐慌の交替・による諸関連が彼等にたいし優勢で彼等を無意志的に支配する自然諸法則として現象し、彼等にたいし盲目的な必然性として作用する、その仕方様式には立入らない。というのは、競争の現実的運動は吾々の計画の範囲外に横たわり、吾々はただ、資本制的生産様式の内的構造のみを、いわばその観念的平均において叙述すべきだからである。」⁽¹⁾（傍点——引用者）

この文章は、『資本論』の叙述内容の基本的性質を示したものとして、しばしば引用されており、そのこと自体には別に問題はないのであるが、ここでとりあげたいのは、右の文章において『資本論』の叙述について、それがとりあつかっている内容と叙述の性質という二つの方面から規定されているということ、すなわち「資本制生産様式の内的構造」という言葉は、『資本論』がとりあつかっている内容を示しており、「観念的平均における叙述」という言葉は、その叙述の性格を示しているということである。

このような区別をとりたてて問題にする理由は、外国貿易についての固有の分析が『資本論』には含まれていないという場合、それは『資本論』の叙述の性質が「観念的平均における叙述」だからではなくて、それがとりあつかっている内容が「資本制生産様式の内的構造」の考察に限定されているためであるということを明確にしておきたい